

## 紅イモ品種の戦後からの軌跡



沖縄いもづる会 会長

きりはら しげもと  
桐原 成元

九州沖縄農業研究センター糸満駐在 上級研究員

おかだ よしひろ  
岡田 吉弘

沖縄の“紅イモ”の原点は、何であったのか。1970年代後半、読谷村（よみたんそん）では、その当時県内で最も濃い紫色系肉色の品種であった「宮農36号」を使って紅イモでむらおこし事業を実施したところ、“読谷紅イモ”は県内での評価は高まり、地域ブランドとして定着していった。その後、“読谷紅イモ”として県内各地で栽培されるという現象が起こった。

かんしょが伝来して以来、読谷村が“紅イモ”と称し、濃紫の肉色で差別化していくまで、肉色への関心は薄く、専ら収量や食味を主体に選抜が行われてきた。農業試験場等で人工交配が開始されるまでは、古い在来品種の肉色がわかる資料は少ない。濃紫色系の品種は、「農試資料第3号：琉球農業試験場（1968年4月）」には「宮農36号」1品種が記録されているが、それ以前の「沖縄に於ける甘藷の育種事業とその業績の概要 農林省農業改良局研究部 昭和26年2月（1951年）」の品種の特性表では紫斑となっているものが保存品種175のうち9品種で、全体の0.5%に過ぎず、肉色が紫や濃紫の品種は存在しない。「宮農36号」が育成される1947年以前には、濃紫色系の品種が記録された資料は探せていな

い。旧・九州農業試験場で「アヤムラサキ」が育成されていく前段とケースが似ていると感じられる。

では、「宮農36号」はどのような経緯で登場したのであろうか？、交配親は記録されている。「紅」×「ハワイ」である。「紅」は「紅芋」、「紅藷」等の名称を持っているが皮色は紫紅で肉色は白である。「ハワイ」は、戦前から戦後数年のうちにハワイから導入された複数の品種の一つと考えられるが、交配親に使われた「ハワイ」は肉色の記録が探せず不明である。現在、濃紫色系かんしょに使われている“紅イモ”の名称は、垣花実記<sup>かきのほなじつき</sup>らによって交配親としても高く評価され、1950年代に県内で栽培が広まった「紅芋」、「紅藷」の品種名が呼び名としてなじみがあったものと思われる。

現在、“紅イモ”は沖縄の特産品を表す名称の一つとなっている。そこで、“紅イモ”のルーツについて品種ごとに迫っていく。主な“紅イモ”の品種は、「宮農36号」、「備瀬」、「ハワイ紅」、「V4」、「沖夢紫」、「ちゅら恋紅」である。

### 宮農36号

沖縄の“紅イモ”は、「宮農36号」ぬきに

は語れないほど重要な品種である（図1-A）。日本復帰後しばらく経った1970年代後半、初代の“読谷紅イモ”として名を知られるようになった。この品種は1947（昭和22）年、当時の宮古群島政府宮古農事試験場に勤務していた垣花実記かきのはなじつきらによって育成され、系統番号のまま40年以上を経た1989（平成1）年に県の奨励品種となった。この「宮農36号」の来歴についての手がかりはほとんど残されていないが、僅かに残された古い手書きの資料では（コピーされ綴られている：出所不明）、以下のとおりとなっている。

#### 甘藷優良品種の出現

宮古農事試験場に於いては食糧増産の重要性に鑑み甘藷の優良品種を育成すべく1947年度に既在品種中優良品種と認められ

る紅芋を基礎として交配を行ひ1948 1949年度間に各系統について形質調査収量調査を終って次表の通の成績を得らるる。同表に依ると沖縄100号の収量を100として沖縄100号以上の指数を示せる品種が15品種も表はれてゐる。

別の資料に、宮古島の中堅篤農家を中核として結成した宮古島農事研究会が、1950年新春に創刊された会誌「土」に掲載された宮古群島政府友利清俊農林部長のあいさつ文の一節が以下のとおりである。

御覧なさい。垣花実記場長の苦心と研究と努力によって育成された甘藷の優良品種の数々を。これを如何なる方法でどんな人を得て、普及し奨励したらよいか皆様と共に研究したい。…

「宮農36号」は、1947～1949年にかけて、

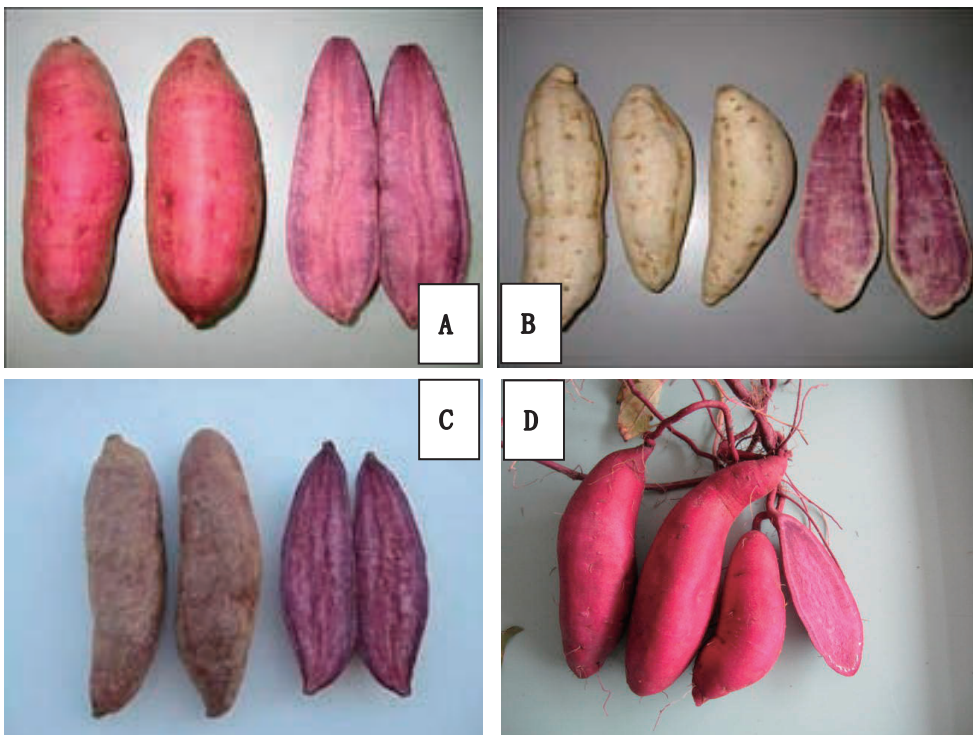


図1 沖縄県の主要なかんしょ奨励品種

A：宮農36号 B：備瀬 C：沖夢紫 D：ちゅら恋紅

宮古農事試験場に勤務し、場長となる垣花実記らによって選抜育成されたもので、1949年当時には15系統が選抜されている(表1)。人工交配によって育成された「宮農36号」の交配親となった品種は、母本「紅」×花粉親「ハワイ」である。母本となった「紅」は、戦後の県内で普及した品種であり、他の資料では「紅」、「紅蒞」、「紅芋」、「紅いも」等と記載されている。親となった品種は、琉球農事試験場の手書きのガリ版で

刷られた品種別の特性を記載した資料(1970年頃作成)によると、「紅蒞」で記載され、イモの特性は紅皮で白肉色である。また、ハワイ名では、「ハワイ」、「ハワイA」、「ハワイB」、「ハワイ導入」の4品種が記載されているが、「ハワイ」の肉色が白、他は肉色が記録されていない。沖縄県農業試験場となった日本復帰後も新たな保存リストは作成されていないようである。表1は、1947～1949年にかけて、宮古農事試験

表1 宮古農事試験場で選抜された系統の特性 (1949)

系統名	母本	花粉親	
宮農1号	紅	八重山赤粉	草勢は強く、つるは徒長する傾向がある。晩生種。食味優秀粘質。豊産だが、あまり肥大しない。虫害中
宮農4号	紅	沖縄100号	つるが細い。草勢中、周年栽培可。早生種。食味良好。粘質。豊産で肥大する。虫害に弱い。
宮農7号	八重山赤粉	沖縄100号	草勢は強い。周年栽培可。晩生種。食味極優秀。粘質還元作用無。豊産。虫害に強い。
宮農9号	沖縄100号	不明	草勢強く周年栽培なるも夏植えでは虫害に弱く早生にして粉質。食味良好。豊産よく肥大する。土質を選ばない。
宮農13号	紅	沖縄100号	草勢中。周年栽培可。中生。食味優秀。粉質。極豊産。肥大力強く、虫害に強い。
宮農15号	紅	沖縄100号	草勢弱く、晩生にして粘質。食味良好にして、虫害に強い。
宮農16号	紅	沖縄100号	草勢中。中生。粘質。食味良好。肥大力強く、虫害に弱い。
宮農24号	紅	沖縄100号	草勢が弱くて冬作には不向。集約栽培に適す。早生にして粉質。食味良好。各節に芽がつく。虫害中
宮農28号	紅	沖縄100号	草勢中。周年栽培可。極早生。粉質。食味劣る。極豊産。肥大力強く、虫害に弱い。
宮農36号	紅	ハワイ	草勢強く晩生。粉質。食味優秀。虫害に強い。
宮農43号	紅	沖縄100号	草勢極強く、早生で周年栽培可。粉質、食味優秀。粗放栽培に適する。豊産で虫害に弱い。
宮農60号	紅	沖縄100号	草勢強く、中生で周年栽培可。粉質、食味良好。豊産で肥大力強く、虫害に弱い。
宮農72号	紅	八重山赤粉	草勢強く、晩生で周年栽培可。粉質、食味良好で収量は劣るが、虫害に極めて強い。
宮農75号	紅	沖縄100号	草勢強く、晩生。粘質、食味優秀。肥大力強く、虫害に強い。
宮農83号	沖縄白100号	紅	草勢強く、徒長する傾向がある。粘質、食味優秀、虫害中、中生

場で選抜された系統の特性を表したものであるが、肉色の記載はない。

1947年は終戦の2年後である。1949年までの3年間で少なくとも83系統（宮農83号が選抜されている）のなかから15系統が選抜され、3年後の1952年には宮農系統は、1号、7号、13号、23号、75号の5系統（宮農36号は含まれていない）が、1972年の日本復帰の頃には、宮農7号と36号の2系統が沖縄農事試験場で保存されている。宮古島にある宮古農事試験場で選抜された「宮農36号」は1961年に沖縄本島へと導入が図られ、1960年代には県内での栽培面積は、「てるま照間」、「へんざん平安山7号」に次いで3番目に普及し、沖縄本島でも栽培が広まっていた。育成から25年余り経った1975年ごろ読谷村の座喜味かんしょ生産組合の比嘉榮次郎氏らが、那覇市の農連市場内にある焼きいも業者から種いもを譲り受け、村内で栽培を広め、1980年頃、村による紅イモでむらおこし事業によって“読谷紅イモ”として「宮農36号」は注目を集めるようになった。1989年には、ようやく県の奨励品種となったのである。「宮農36号」は、育成から県の奨励品種となるまでに40年余りの歳月が経っていた。県の奨励品種となる前に、この品種を普及させていった読谷村の着眼点はすばらしく、この個性的な特徴を持った品種を入手し、むらおこしへと活用したことが、今日の沖縄の紅イモ文化へとつながる礎となった。

しかし、読谷村で、“読谷紅イモ”として華々しくデビューした「宮農36号」は、かいよう病の多発により栽培面積が減少し、1980年代後半には「備瀬」に入れ替わっていった。一方、1990年頃、かんしょ栽培

を始めた<sup>とうやまもりはる</sup>当山盛春氏は、うるま市にある宮城島のジャーガル土壌（粘板岩質土壌）で栽培する「宮農36号」には、読谷村で多発したかいよう病は見られず、収量は中程度だが、形状、肌、食味が良く、肉色は鮮やかな赤紫を呈し、繊維が少なく加工歩留が多く、蒸しイモに変色が見られない等の加工特性に優れることを突き止め、この品種を使ったペーストは加工業者から菓子原料として高く評価された。宮城島では、2000年頃には最大15haまで栽培面積を広げるようになった。1990年代は、「宮農36号」が読谷村から宮城島へと産地が移っていった時期であった。

「宮農36号」の収量性が低い欠点をしのぐ優れた特性は、鮮やかな赤紫色と食味の良さであった。しかし、2000年を過ぎた頃から肉色が淡色化し、色ぬけして白くなる等、肉色が不安定となってきた。徐々にその傾向が増していったが、原因は明らかになっていない。「宮農36号」は、肉色が淡色化し不安定となるなかで2010年頃には経済栽培をする産地がなくなってしまった。

## 備瀬

“紅イモ”をブームから文化へ、沖縄のソウルフードへと導いた品種が「備瀬」である（図1-B）。品種名となった「備瀬」は、採取地名に由来する。

1980年代前半、県内各地でかんしょがどのように栽培されているのか見て回ったところ、農業試験場にはない色々なタイプの茎葉のものが、特に家庭菜園のような小規模栽培畑で見られた。これらを採取し特性調査を実施し、その中で本部町備瀬地区から採取した「備瀬」は、地名がそのまま品

---

種名となって普及していった。当時、農業試験場では300を超えるかんしょの品種や系統を保存していた。肉色が淡紫や紫斑を呈する品種は数種類あったが、そのなかには「備瀬」のように白皮で肉色が濃紫のイモは存在しなかった。

1980年代の後半、読谷村のかんしょ関係者が農業試験場から持ち帰った「備瀬」の試験栽培では、“かいよう症状”の発生が見られず、収量も高いことから村内では「宮農36号」を駆逐しながら栽培を広げて村内に定着し、“読谷紅イモ”＝「備瀬」となるまでに至った。その後、県内各地に普及していった「備瀬」は読谷村だけに止まらず、沖縄で栽培される代表的な“紅イモ”となった。「備瀬」も「宮農36号」と同様、読谷村を中心に地域のかんしょ栽培農家から普及していった品種である。「備瀬」は、採取から14年を経て1997年に県の奨励品種となった。読谷村に持ち込まれてから今日まで、約30年の歳月が経過している。根強い人気に支えられ、県内産地で栽培が続けられている。

読谷村内で最初に「備瀬」が持ち込まれたのは座喜味かんしょ生産組合であるが、その中でも「備瀬」との関わりが大きいのは組合員の一人、波平永吉氏である。波平氏は米軍用地であった読谷飛行場跡地内の黙認耕作地で、かんしょの栽培をおこなってきた。黙認耕作地は、大半が藪地で、スキヤギンネムが生い茂っている。これらを伐採、開墾、整地し、畑（黙認耕作地）の栽培面積を増やしていった。波平氏が栽培する品種はほとんど「備瀬」である。面積が広がったこともあり、作業を分散させ、周年出荷できるよう、24節気に基づい

て独自の栽培暦を使った植付けと収穫体系を築きあげた。「備瀬」の栽培特性を熟知した人物である。

2005年、野國總管400年祭が開催された。パネリストであった塩谷格氏らを「備瀬」の採取地へ案内した。その際に同行した初代沖縄いもづる会伊波勝男会長は後日、備瀬部落を尋ね歩き、「備瀬」のルーツを突き止めた。那覇市在住で久米島出身者に嫁いだ本部町備瀬出身の方が、久米島で栽培されていたイモを久米島町在住の義姉からもらい受け、里帰りした際、実家の親に渡したとされるが、その年代を覚えていないとのことであった。この在来品種は1980年の初め頃には備瀬部落周辺では、実家の屋号にちなんで“セイサンヤーいも”等と呼ばれ部落周辺で栽培されていた。

2012年、沖縄いもづる会のメンバーは久米島へ行き、大田副町長を訪ねた。1960年代のかんしょ栽培に詳しい大田氏によれば、久米島から「備瀬」が持ち出される前は、島の北西部の一带で栽培されており、“開墾いも”と呼ばれていた。しかし、いつごろから栽培されていたのか、また、島内ではどのように評価されていたのか現在のところ不明である。今後、「備瀬」について、久米島における地誌や字誌等からの追跡調査が望まれる。

1983年の採取した当時の「備瀬」は、肉色が他のどの品種よりも濃紫を呈していた。それから30年余り経った現在、「宮農36号」と同様、肉色の退色現象が顕著になってきた。肉色が、白紫斑、淡紫または白等の個体が出現しており、濃紫を呈するものが減少している。「宮農36号」を後追いし、姿を消さないように、いかに濃紫色の「備

瀬」を維持するかを課題として原因を究明し、栽培技術体系を確立することが、喫緊の課題である。

## ハワイ紅

日本復帰前の琉球農事試験場の資料によれば、保存品種のリストにはハワイ名の付く品種は「ハワイ」、「ハワイA」、「ハワイB」、「ハワイ導入」の4種類で、「ハワイ」は肉色が白となっている他は空欄となっており、3品種については不明である。「ハワイ紅」は「備瀬」と同様、白皮で肉色が濃紫の在来系の品種である。1980年代中ごろには、沖縄本島南部地域にある糸満市喜屋武や具志頭村等で栽培されていた。この品種の名称から、ハワイから導入されたものであると考えられるが、由来については不明である。紫の肉色に「紅」と称したことは、読谷村が「紅イモ」と呼び始めた1970年代後半より後であり、「ハワイ紅」は後付けされた名称であると考えられる。この「ハワイ紅」は、2000年になったころ、八重瀬町（旧・具志頭村）で安里美津男、喜美子夫妻によって設立された「ぐしちゃんいも研究会」を中心に普及が進み、広く知られるようになった。安里氏によれば「ハワイ紅」は以前から地元で栽培されており、この地区に適した“紅イモ”だったとされる。しかし、「ハワイ紅」の名称について、地域の別名や由来等は存在していなかった。八重瀬町では、読谷村とは品種が異なるが、「ハワイ紅」を使った“紅イモ”の産地となって、2010年頃まで栽培が継続された。

2005年頃まで、久米島で最も重要な品種となっていた「ハワイ紅」は、次第にイモ

の肥大が悪くなり、肉色の退色現象によって栽培面積が減少していた。2010年、「ハワイ紅」をハワイから持ち帰ったとの情報が入ってきた。2012年に「ハワイ紅」のルーツを聴き取るため、2度にわたり、久米島在住の仲村智弘<sup>なかむら ちこう</sup>氏を訪ねた。沖縄いもづる会の会員である高良若菜<sup>たから わかな</sup>氏の聴取りによれば、仲村氏自身が直接ハワイから持ち込んだのではなく、1955年ころに那覇市小録出身の知人が持ち帰ったとのことだった。この友人に確認したところ、小禄具志在住の遠縁の親戚から仲村氏に渡たされたとのことであった。久米島への導入当時、仲村氏によれば、「ハワイ紅」は島での呼び名は無く、遅れて沖縄本島での呼び名が入ってきたとのことであった。島内で“開墾いも”と呼ばれていた「備瀬」は、「ハワイ紅」が持ち込まれる以前から、島で栽培されていたが、肉色の良い「ハワイ紅」に入れ替わっていったとのことであった。

話は戻るが、「宮農36号」の交配親となったのは、母本「紅」×花粉親「ハワイ」である。母本となった「紅」は、肉色が白であり、花粉親となった「ハワイ」についての肉色は不明ながら、沖縄本島南部地域で復帰前の時点ですでに栽培されていたとされる「ハワイ紅」が1947年より前に、ハワイから宮古島へ導入され、花粉親として使われた可能性は考えられる。

## V 4

1990年ころ、読谷村は、「紅イモでむらおこし」シンポジウムに梅村芳樹氏をパネリストとして招へいた。梅村氏はイモ類に詳しく、かんしょについて、特に沖縄の紅イモには強い関心を持っていた。梅村氏

---

は来沖の際、濃紫色のイモを数種類持ち込み、読谷村で試し栽培がなされたときとされる。そのうちのひとつが1995年頃には沖縄本島中北部で栽培が広がっていた。肥大性、形状、揃い、滑らかな表皮、鮮やかな濃紫をした肉色と外観が既存の“紅イモ”と比較して遙かに優れ、その外観から食欲をそそるものであったが、期待を大いに裏切った。食味評価はやや甘みはあるものの、えぐみを伴い、せいぜい中下であった。数種類持ち込まれた濃紫色系かんしょの“4番目”の意味から「V4」と呼ばれるようになったようである。地域によっては“ベニヒカリ”、古宇利島では持ち込んだ人の名をとって“ヤマガワムラサキ”と呼ばれていた。この「V4」が経済栽培されるようになったころの衝撃は大きく、外観の良さや色の濃さから市場単価が高く、直売所でも飛ぶように売れた時期があった。加工用として、特にタルト等の菓子原料としては、当初、蒸しイモは軟らかく、水っぽく扱いづらいとされたが、繊維が少なく滑らかな肉質と鮮やかな濃紫色から次第に加工原料用の主要品種となっていった。「V4」以前、主に利用されていた「備瀬」では、食味は良いものの色彩がくすんでおり見た目に映えず、人気もいま一つであったが、「V4」の生イモ肉色は濃紫色で肉色の色ぬげがないため安定した色彩の紅イモペーストが得られ、タルト等菓子製品は鮮やかな赤紫色を呈した。今日では、紅イモ菓子等の加工製品は、様々な種類が開発され、県外・国外へのおみやげとして人気が高い。また、県外でも紫イモ品種を使った菓子製品等が駅や空港、観光スポットでも見かけるようになった。「V4」の出現によって、“紅イ

モ”をもう一段押し上げ、ブームの先駆けを作ることとなった品種である。

### 紅いも新品種の育成

1995年ころの紅イモ事情は、食味が良いが、収穫の時期や個々のイモによって肉色の濃淡が見られ、色の安定性に欠けるタイプの「宮農36号」、「備瀬」、「ハワイ紅」と、鮮やかな濃紫色を呈するが、えぐみが強く食用に適さない「V4」や、県外では「アヤムラサキ」があり、これら2つのタイプに分かれていた。既存の紅イモ品種は一長一短であり、多収で、外観に優れ、肉色が鮮やかな濃紫色を呈し、食味の良い“紅イモ”の育成が目標であった。

このころ、「宮農36号」、「備瀬」を交配親として人工交配の計画を検討していたところ、1996年、読谷村で約20aの「備瀬」畑の一角で30本ほど「V4」が試し植えされていた。両品種とも開花性は非常に良く、V4の株とその周辺の備瀬の株には、自然交雑によって多数結実していた。そこで、両品種の長所を併せ持った濃紫色で食味の良い品種が育成できるのではないかと、「備瀬」と「V4」の株から各々約300粒ずつの種子を採種し、これらの種子を持ち帰り、園芸支場内で実生選抜試験を開始した。3年間の選抜試験を繰り返した結果、「V4」の種子からは優良系統は選出されなかったが、「備瀬」から採取した種子からは、系統番号が沖育96-1-15と96-1-18の2系統が選抜された。これらの選抜系統が後に「沖夢紫」、「ちゅら恋紅」と命名されることになる。

## 沖夢紫

「沖夢紫」は、育成から7年後の2003年に品種登録された(図1-C)。この品種の特性は、肉色が濃紫で甘みが強く、ねっとり系の肉質は沖縄で好まれる嗜好性を持っていた。育成途中で読谷村で実施した現地試験の評価が高く、村では品種になる前の系統の段階で「備瀬」に置き替わる勢いで栽培が増えていった。この頃、肉色がオレンジの粘質で甘みの強い種子島の“安納いも”が東京を中心に全国的に脚光を浴びていた。この“紅イモ”の系統も同様に粘質で甘みが強いため、蒸熱処理を行い、生イモの県外出荷を計画していた。そのため、県では急きょ品種登録を早めた経緯がある。欠点は、①収量の不安定さ、②形状が不整形、③収穫後のイモが腐れやすい等の負の特性が後に明らかとなった。まだまだ改良する余地があるが、この品種の誕生によって、目標とする“紅イモ”に一步近づくことができた。現在、主な産地は久米島、石垣島であり、他の産地でも小規模での栽培が見られる。久米島では焼きいもに利用されるようになり、観光客にも人気となっている。また、香港等の海外にも輸出され、食味でも高い評価を得ている。石垣島ではタルト等の菓子原料用に栽培されて、観光客みやげの売れ筋商品となっている。紅イモ品種の中では最も食味の評価が高い品種である。

## ちゅら恋紅

「ちゅら恋紅」と「沖夢紫」は「備瀬」×「V4」を親とする兄弟品種である(図1-D)。育成中の系統番号が96-1-18であ

るが、後に「沖夢紫」となる系統番号96-1-15と同時期に、同じほ場で育成試験を実施してきたが、96-1-15は食味の評価が非常に高かったことから早い段階で品種登録され普及していった。一方96-1-18は、同じタイプの「V4」がすでに広範囲で栽培されており、現地試験での評価が遅れ、品種登録までに年月を要した。品種登録されたのは育成から16年後の2012年である。

「ちゅら恋紅」の特性は、赤みを帯びた濃紫色で、肉色の安定性は良い。また、加工業者が指摘する「V4」の肉質が軟らかく、水っぽいため加工歩留まりが低いとする欠点を改善することができたこともあり「V4」から「ちゅら恋紅」への品種の入れ替えが進んだ。現在、県内では紅イモ栽培の中心的な品種となっており、宮古島、久米島、八重瀬町具志頭、読谷村、うるま市、伊江島等のかんしょの主要産地で栽培されている。2012年度の品種別の栽培面積は、これまで栽培面積が最も多かった「備瀬」を抜き、県内で50%を超え、さらに増加傾向となっている。

## 参考文献

- 宮古島農事研究会. 1950. 会報創刊(手書き).
- 農林省農業改良局研究部. 1951. 沖縄に於ける甘藷の育種事業とその業績の概要. 琉球農業試験場. 1968. 農試資料第3号. 琉球農業試験場. 甘しょ品種の特性. 作成年不記載(手書き).
- 沖縄県農業試験場. 1981. 沖縄県農業試験場百年史.
- 比嘉武吉. 1998. 甘藷の文化誌. 榕樹書林.